

四組 六場面

作者は、えびフライのおいしさを伝えると共に、自分たちだけがあんなにおいしいものを食べたという、主人公の心のどこかにあった罪悪感を表に出すために、祖母が墓に向かつて「えんぴフライ」とつぶやく場面を設定した。

澤本さん

作者は、家族で墓参りに行く中、祖母が念仏を唱えながら「えんぴフライ……」という場面を設定した。それは、主人公が、母親はこんなおいしいものを食べたことがあるのかな？とふと考え、祖父や母親にも食べさせてあげたかったな、という主人公の優しさを表すためだと思います。

赤座さん

作者は、母親にえびフライのおいしさを伝えたいのと、食べさせてあげたかったということを主人公が思ったという設定をした。祖母が南無阿弥陀仏を唱えている間に、「えんぴフライ」とつぶやいたことから、母親にえびフライのおいしさを伝えようとしていることが分かる。二人にとってえびフライを食べたことは、たぶんもう食べられないようなものなので、忘れられない思い出だと思います。

田中さん

作者は、主人公が母をととても大切に思っていることや、立派な墓でないので申し訳ないという思い、父親の自分を責める思い、祖母や主人公のえんぴフライを母親や祖父に食べさせてあげたかったという一人一人の思いを表すために、祖母が「えんぴフライ」と言う場面を設定した。

下り藤さん

作者は、祖母に「えんぴフライ」と言わせることで、食べていない祖父や母親への申し訳ない気持ちを表している。主人公も自分なりに母親のことを考え、自分たちだけ良い思いをしているので、母に申し訳ない気持ちを持っていることを読者に分かってもらうために、祖母が「えんぴフライ」と言う場面を設定した。

古沢君

作者は、墓参りの時に、コスモスやききょうという、色鮮やかな花でせいぜい色取りをつけたりして、明るい墓参りのようにして、祖父と母に悲しいという感情をかくしていたが、父親が崖の上に腰を下ろして黙ってたばこをふかしていたり、祖母が「なまん、だあうち」の合間に「えんぴフライ」とこぼしてしまったりなど、複雑な感情を隠して、明るい墓参りをしていることを表したくて、「えんぴフライ」と言ってしまうよう設定した。

岩田さん